翻訳と通訳

2014 年 5 月 3 日

田中　健彦

1. まえがき

世の中には外国語の知識や能力を生かして生計を立てたいという人が大勢いる。それらの人々のほとんどは、大学の外国語学科または外国文学科で、ある外国語を習得している。外国語力を生かした職業は、三つに大別できる。すなわち、翻訳家、通訳者および語学教師である。ここでは、このうち主として翻訳および通訳を取り上げて、日本における一般的な仕事の内容や注意すべき点について述べ、最後に筆者自身のこれらの分野における経験も紹介する。

翻訳および通訳の仕事は、本人の専門知識のみに頼るという点で、ある意味では税理士や司法書士などの「士業」に似ている。異なるのは、国家試験に合格し、資格を取得する義務がないという点である。その代わりに、誰でも就くことのできる職業ではあるが、それだけで生計を立てられる実力を得るのは容易ではないと言える。

2. 翻訳および通訳

2-1. 翻訳および通訳の定義

翻訳および通訳とは、言語 A で表現された情報を、それと等価の、言語 B で表現された情報に置き換えることである。ここで「等価」ということばが大切であって、言語 B で表現された情報を言語 A で表現された情報と比較して過不足があってはならないということである。英語では翻訳を translation というが、このことばは、工学的には「平行移動」という意味で使われている。

なお、冒頭の文の「表現された」を「書かれた」にすれば、翻訳の定義に、そして「話された」にすれば「通訳」の定義になる。

2-2. 翻訳と通訳の違い

(1) 翻訳は、訳語が分からない場合、納期の許すかぎり十分調査する時間的余裕があるが、通訳は瞬時に翻訳しなければならない。通訳をしているとき、訳語の分からない原語に出くわした場合、不適切な訳語を当てることになるので、聴く者にとって話者が何を言おうとしているのか理解できないという事態が生じるおそれがある。

(2) 翻訳文は、データが半永久的に保存される。間違った翻訳や低品質の翻訳は、納品後依頼者から苦情がくることがある。ただし、訳文を納入してからあまり時間が経過していない段階で誤りに気が付いた場合、依頼者にフィードバックすることはできる。通訳の場合、このようなフィードバックは不可能である。

(3) 通訳のデータが残ることは翻訳に比べて少ないが、国際会議や法廷での通訳では録音されることがある。過去には、二国間の政治交渉の際の通訳のミスで重大な事態を招いたことがある。

3. 翻訳

3-1. 翻訳の学習法

大学である外国語を習得したとしても、すぐ翻訳ができるわけではなく、翻訳の手法について学習する必要がある。その手段は次のとおりである。

(1) 外国語大学または総合大学の外国語学部に翻訳コースが設置されていればそこで学習する。

(2) 翻訳学校に通う。翻訳学校の場合、講師に直接質問できるので便利である。

(3) 翻訳通信教育を受ける。最近はインターネットによる翻訳講座がほとんどである。通信教育の場合も講師に質問できるが、講師との細かいやりとりがしにくい。

(4) 筆者は技術翻訳および通訳を専門としているが、この分野では翻訳学校や翻訳通信教育は、レベルのあまり高くない場合があるので注意しなければならない。これは、翻訳学校の講師や翻

訳会社のテキスト執筆者の中に技術系の学校を卒業し、技術系の仕事に就くことにより、豊富な技術知識を蓄えている人がほとんどいないからである。これについては、3-2.翻訳業界の(5)翻訳教育会社の問題点を参照していただきたい。

3-2. 翻訳業界

とりあえず日本の翻訳業界について述べる。翻訳は出版翻訳、産業翻訳および社内翻訳に大別される。

(1) 出版翻訳

1) 言語

大部分が英日翻訳の仕事であり(90%くらい)、他言語の仕事は少ない。

中国語関連の仕事は増えているが、具体的なデータはない。

2) 市場規模(推定)

職業としての翻訳者の対象になる翻訳書は年間1000～1500点、年に3冊以上の翻訳書を出している人は100～150人、年に1冊か2冊継続的に受注できる人数百人、そして出版翻訳だけで一家の生活を支えられる人は数十人であると言われている。

3) 分野

文芸、人文、歴史、科学、技術、ビジネス、時事等。

4) 仕事の獲得方法

出版社に登録してもらい、翻訳依頼を待つ、新聞広告に応募する、翻訳関係雑誌から、翻訳者を募集している会社を探すなどの方法がある。

5) 出版社からの発注方法

出版社が自ら登録している翻訳者から適任者を検索し、翻訳料・納期等について交渉する。例:「インターネット入門」という本の場合、言語:英日、分野:コンピュータ、専門分野:通信になるので、翻訳者データベースで英日＋コンピュータ＋通信でAND検索を行う。該当者が3名おれば、担当者が順番を決めて交渉する。

6) 収入

出版社と翻訳者との契約段階で、翻訳料が決まる。その本の売上部数に比例して収入が増える。

7) その他

翻訳者の最終決定は、産業翻訳と比較して出版社の担当者の個人的感情が入ることが多いと言われている。たとえば、翻訳候補者が3名いた場合、翻訳の実力よりも、担当者の好き嫌いで、翻訳者を決めることがあるという。

出版翻訳の場合、出版される本に著者名および訳者名が表示される。過去に本を何冊翻訳したかが、それ以降の翻訳者の評価の大きな要素になる。

(2) 産業翻訳

翻訳の仕事としてはこれがもっとも多い。

1) 言語

大部分が英日または日英翻訳の仕事であり(90%くらい)、他言語の仕事は少ない。

中国語関連の仕事は増えている。現在、他言語の仕事のうち 20～30%が中国語であると言われている(中国語がもっとも多く、ドイツ語、フランス語がこれに続く)。

2) 分野

理科系:理学(物理、化学)、工学(機械、電気、化学、土木、通信、エネルギー)、医学(医療

機器含む)、IT(コンピュータ、各種ソフトウェア)
文化系:経済、経営、法律、金融

3) 文書の種類

理科系:論文、専門書、取扱説明書、仕様書、規格、特許明細書、技術資料、製品カタログ、ホームページ。特許明細書および薬事関係書類を翻訳するには特別な専門知識が必要であり、翻訳者が不足しているが、これらの分野でプロの翻訳者になるのは容易ではない。

文化系:調査報告(例:○○国のエネルギー事情)、契約書、会社案内、雑誌記事、法律文書

4) 市場規模

継続的に受注できる人数千人〜1 万人

5) 仕事の獲得方法

在宅翻訳者を募集している翻訳会社をインターネットで探し、応募する。ふつう試験問題が送られてくるので、解答を送り返し評価を待つ。

翻訳者協会の会合に出席し、翻訳会社を探す。

知人・友人に翻訳を外注している会社を紹介してもらう。

6) 翻訳実務における注意事項

英日翻訳の場合、原文の英語の品質は比較的よい。というのは、欧米ではライティング教育が普及しているからである。ただし、ドイツ語等から英訳した原稿の場合、品質がよくないことがあるので、専門分野の知識を活用して正しい訳を模索しなければならないことがある。また、独英併記の原稿の場合、ドイツ語の知識があった方が作業がしやすい。

日英翻訳の場合、原稿の品質が悪いことが多い。特に純技術系の原稿はほとんどすべて品質が悪いと言ってよい。というのは、英語のできる技術者は、自分で英文原稿を書くからである。このような場合、俗に日英翻訳を開始する前に「日日翻訳」が必要であると言う。文科系であっても原稿が悪いことがある。

7) 外国語から母語への翻訳と母語から外国語への翻訳

外国語から母語への翻訳とは、たとえば日本人が英語を日本語に翻訳することを言う。この外国語から母語へという方向が、世界中どこの国においても普通である。一方、母語から外国語への翻訳についても、たとえば日本では日本人が日本語を英語に翻訳することが多い。この場合、重要な文書についてはいわゆるネイティブチェック(英語圏の人間によるチェック)を行うのが普通である。

時には、日本に在住する外国人が日本語を本人の母国語に翻訳することもある。筆者の経験では、その訳文の品質は必ずしも高くない。というのは、上記 6)で述べたように日本語の原稿品質が悪く、日本人なら理解できる原稿でも外国人には正確に理解できないことがあるからである。

(3) 社内翻訳

1) 一般企業

貿易会社(商社)、自社製品を輸出している機械メーカ、社内設備を輸入しているメーカなどで、翻訳の仕事が発生する。ただし、組織として翻訳部門を抱えている企業は少なく、別の業務と並行して翻訳をこなす場合が多いと思われる。翻訳は、外部の専門業者に委託すれば、他の業務の支障にならず、社内で翻訳するよりも効率的であるが、企業の上層部が、社員全員が英語を使えるよう自発的に学習することを求めている場合も多い。

なお、最近の報道によれば、社内会議を英語で行うと宣言している会社もある。

2) 翻訳会社

在宅翻訳者募集試験の採点、クライアントから請け負った翻訳文章のチェック、または緊急の場合の翻訳実務遂行のために翻訳者をおいていることがある。

(4) 翻訳教育会社の問題点

すでに述べたように、翻訳学校に通うか、または通信教育（インターネットによる）を受けて翻訳の学習をする人が多い。ただ、筆者の経験した技術翻訳（英日翻訳）の通信教育には問題点が多かった。すなわち、テキストの英語の語法に関する説明はすばらしいが、例文の模範訳の間違いが多い。これはテキスト作成者の技術的知識が乏しいからである。この通信教育では、毎月課題があって訳文を提出し、採点してもらうことになっている。この課題に対してこちらが提出した解答が正しいのに、翻訳教育会社の誤った模範解答に沿って添削・採点されることがあった。また、この翻訳教育会社は、通信教育とは別に、定期的に昇級試験を行い、合格者に、認定証を出すということも行っていた。ところが、この場合も間違った模範解答で採点されるので、正しい解答を出した人は昇級できないという本末転倒の事態が生じる。これに関連したことを 6.「筆者の経験」に述べたので参照していただきたい。

また、筆者は翻訳学校に通ったことがないが、知人の話によるとテキストの内容が技術的に間違っていて講師にそれを指摘したが、明確な解答がなかったことがあるという。これも上記の通信教育と同じで、テキスト作成者と講師がともに、英語には詳しくても技術分野の知識がないという事例であろう。

(5) フリーランス

1) 概要

フリーランスとは上記(2)の 5)で述べた在宅翻訳者のことで、どこの企業にも属さず、職業の分類としては自由業になる。産業翻訳では、このフリーランスがもっとも多い。通常、フリーランスは複数の翻訳会社の採用試験を受け、合格すればその翻訳会社に登録してもらう。ただ色々な問題点がある。

2) フリーランスの問題点

- 翻訳会社の翻訳者募集に応募して試験の解答を送ってもすぐに採点してもらえず、結果がなかなか判明しないことがある。
- 解答に自信があっても、不合格となることがあるが、翻訳会社から模範解答を入手することができない。具体的には、翻訳会社が採点のときに使う模範解答が間違っている可能性がある。特に技術系の試験問題の模範解答を技術に詳しくない人が作った場合、その模範解答が間違っていて、受験者の解答の方が正しいことがありえる。
- たとえ翻訳会社から合格の通知が来たとしても、すぐに仕事がもらえるとは限らない。これへの対策は、できるだけ多くの翻訳会社の試験を受けて、合格し、在宅翻訳者として登録してもらうことである。
- ある翻訳会社から仕事をもらい、その作業をしている間に、他の翻訳会社から仕事の打診がくることがある。そのとき、二番目の翻訳会社の仕事を断ると、以後その会社から仕事がこなくなることがある。
- 以上のような理由から、翻訳専業で生計を立てるのは、かなりの困難をともなう。もちろん、定期的に仕事をくれる翻訳会社が見付かればよいのだが、これは「運」の要素に左右されることがある。

3) 与えられた日本語原稿の品質が悪い場合の対処法

- 翻訳実務において、原稿作成者から原稿を直接入手した場合、電話等で疑問点について問い合わせる。答えをもらった時点で、翻訳者自らが原稿を訂正できない場合、新たに修正原稿を入手しなければならない。
- 翻訳会社から原稿を入手して、疑問点が見付かった場合、原稿にコメントを付けて、翻訳会社から翻訳依頼者に修正原稿を要求してもらう。翻訳作業中に、修正原稿が来る場合と、とりあえず訳文を指定期限内に納めてから修正原稿が来る場合がある。後者の場合であれば、修正原稿を入手し次第、必要に応じて訳文を訂正することになる。
- ここで注意しなければならないのは、翻訳者の仕事はあくまでも原稿を情報の過不足なく別の言語に移し変えることであって、原稿の作成や修正ではない。ところが、このことを理解していない依頼者がいて、翻訳者からの質問に対する回答だけよこし、修正原稿をよこさない場合が、よくある。この場合は、再度修正原稿をもらえるよう交渉しなければならない。

4) 翻訳会社との付合い方

翻訳会社が訳文についてもっとも重視するのは、訳抜けの有無である。翻訳というのは言語 A で作成された文書の情報すべてを言語 B に移し替えることであるのでこれは当然である。次に重視するのは、納期であって、納期が遅れると翻訳依頼者のビジネスに悪影響を及ぼすおそれがあるからである。品質についてはあまり問題にされることがない。というのは、翻訳会社には訳抜けをチェックする社員はいるが、訳文の品質をチェックできる社員はいないことが多いからである。

当然のことながら、品質の高い訳文を作成できる在宅翻訳者をいかに多く抱えるかが、翻訳会社の業績を左右する。つまり、そのような優秀な翻訳者を抱えていれば、同じ顧客から繰り返し受注することができる。また、顧客から前回と同じ翻訳者に翻訳してほしいという要望が寄せられることもある。

英日翻訳ではネイティブチェックを行う翻訳会社とそうでない翻訳会社とがある。前者の場合、文法的な間違いは是正されるが、専門分野の間違いまで指摘できるネイティブチェッカーはほとんどいないと考えてよいだろう。

翻訳会社によっては、登録された在宅翻訳者の「訳抜けの有無」、「納期の順守」、「品質」等について登録された在宅翻訳者各個人の評価表を作成している。翻訳者自身はこのような事実があることを認識しておかなければならない。

(6) 翻訳者の評価

訳文の良し悪しを測る物差しの一つに「心地良さ」がある。すなわち訳文を読んでいて、その内容が気持ちよく頭に入るようであれば、その訳文の品質が高いと言える。その逆に、内容がスムーズに頭に入らないような訳文は、たとえば修飾関係に曖昧さがあるとか、原文を直訳しているために不自然な訳になっていることが多い。

(7) 翻訳者の理想の姿

翻訳者は言語のエキスパートでなければならない。すなわち翻訳者はまず、文法的に正しい文章を書く能力を備えていなければならない。したがって、日本語のライティングについて真剣に学ぶ必要がある。次に翻訳者の理想の姿として、ある分野について翻訳するのではなく、自らその分野の文書を作成する能力を備えていることが望ましい。たとえば、ある機械の取扱説明書の日英翻訳を依頼されることがあるが、依頼された翻訳者は、たとえ原稿がなくても、その機械を実地に観察し、その機械の機能の説明を受けることによって自ら英文の取扱説明書を作成

できなければならない。ということは、翻訳者はある外国語に精通していることはもちろん、ある分野での深い専門知識をもっていることが必要である。

分かりやすい例で言うと、村上春樹は作家であるが、英語の小説の翻訳も行っている。彼の翻訳した小説は、まるで自ら創作したようなものになっているからすばらしいのである。

4. 通訳

4-1. 通訳の学習法

2.の「翻訳と通訳の違い」で述べたことから分かるように、通訳者になるためには、通訳専門の学習が必要である。ただし、通訳の仕事に就くためには、まず優れた翻訳者にならなければならない。通訳というのは、言語 A で発言された内容を即座に頭の中で言語 B に翻訳して相手に口頭で伝えることだからである。

(1) 翻訳の学習

3.翻訳で述べたように、翻訳学校や通信教育で翻訳の基礎を学んだあと、何らかの方法で翻訳実務に就いて、実力を蓄えなければならない。

(2) 基礎的学力の養成

通訳、特に同時通訳は、翻訳と比較して極めて高度な語学力を要求される。通訳と言ってもいろいろなレベルがあるが、あとで述べる国際会議での通訳を目指す場合、自国での学習では不十分なことが多い。やはり、外国に留学して、ネイティブに近い語学力を修得する必要があるだろう。つまり、高度な通訳者になろうとするとかなりの費用がかかることになる。通訳者の履歴を読むと、留学経験のある人、海外赴任の経験のある人、または家族（父や夫）の海外への赴任に伴って海外で生活していた人が多い。

(2) 通訳者になるための学習

海外留学や滞在の経験があり、外国語の会話には不自由しない程度の学力レベルであっても、すぐに通訳の仕事に就くのはむずかしい。会話ができることと通訳ができることとはまったく別の次元になるからである。通訳スキルを学ぶ方法は下記のとおり。また、自分の志す専門分野（政治、経済、外交、金融、医学、技術等）の知識も下記と並行して身に付けていかなければならない。

1) 民間の通訳者養成コースに通う。
これがもっとも基本的なルートである。ここで実力を認めてもらえれば、実務を紹介してもらえる可能性もある。
2) 日本の大学・大学院に設置されている通訳コースで学ぶ。
授業を受けるだけで、通訳者になれる人は稀で、やはり上記のような民間の学校に通うのがふつう。
3) 海外の大学・大学院に設置されている通訳コースで学ぶ。
日本で通訳する場合、業界の慣習を知るため、やはり短期間であっても上記のような民間の学校で学ぶのがよいだろう。
4) 独学で学習し、通訳訓練を受けずに通訳者になる。
海外に滞在して芸能やスポーツなど特定分野で深い知識を蓄えた人であれば、直接通訳の仕事に就ける場合がある。

4-2. 通訳業界

(1) 国際会議

学術会議（医学、IT、環境、エネルギー、金融等）や政府間会議（サミット、ASEAN 等）がこれに

あたる。同時通訳が要求されるので、通訳としてもっとも高度な能力が必要とされる分野である。世界各地の人が参加する会議では、英語以外での発言がすべて英語に訳され、それを各国語に訳すといういわゆる「リレー通訳」が行われることが多い。したがって、たとえば日本語から英語への通訳は、同時通訳が要求されることが多い。

(2) ビジネス通訳

外国人社員をまじえた社内会議、外国企業との打合せ、商談等がこれにあたる。必ずしも同時通訳は要求されず、難易度は国際会議ほど高くない。

(3) 放送通訳

テレビニュースや現地ルポの通訳がこれにあたる。録画放送であれば、あらかじめ原稿を与えられて予備知識を得てから通訳することができる。臨時ニュースや要人会見の生放送の場合、予備知識なしで同時通訳しなければならない。

(4) 司法通訳

法廷、警察、刑務所等で必要とされる通訳である。上記 1)～3)では言語は英語が主体であるが、司法通訳で使用される言語は多岐にわたる。ポルトガル語、タガログ語、タイ語等に対応できる通訳者が不足していると言われている。スピードよりも正確さが要求されるので、逐次通訳になる。

4-3. 通訳の仕事

(1) 国際会議

国際会議専門の通訳派遣会社（エージェント）に登録しておき、仕事の依頼を待つ。ただし、高度な通訳能力が要求されるので、登録してもらうこと自体容易ではなく、ましてや定常的に仕事に就くことは至難の業である。

(2) ビジネス通訳

翻訳会社が通訳派遣を兼業としていることが多く、やはりそういう会社に登録してもらい、仕事の依頼を待つことになる。仕事の分野は様々で、かつ難易度は千差万別である。ただし、通訳だけで生計を立てるのは難しいので、翻訳の仕事をベースにしている人が多い。

(3) 通訳の事前準備

可能なかぎり、通訳する内容を記した文書を事前に入手し、予習しておくことが望ましい。複数の講演者が参加する講演会などでは、通訳を担当する講演者の講演が始まる数時間前にでも、原稿を入手できれば、非常に役に立つ。特に医学や生物学などで専門用語（特にラテン語）が出てくる場合、予習は不可欠である。

講演者との事前の打合せができればベストである。この場合、通訳者側から、原稿をもらえない場合、語句を区切って明確にスピーチしてもらうこと、俗語を使わないようにしてもらうことなどを依頼し、あまりなじみのない地名や人名、ならびに特殊な専門用語についておしえてもらいメモしておくとよい。講演者も自分の講演を参加者全員に理解してほしいと思っているので、通訳者からの依頼には心よく応じてくれるはずである。

5. その他の語学力を生かす職業

本書では、主として翻訳と通訳に関する仕事について述べたが、外国語力を生かす職業として次のようなものもある。

5-1. 語学学校の講師

通訳・翻訳専門の月刊誌や新聞で募集していることがあるので、それに応募する。また、受講生が実力を認められて講師になる場合もある。

5-2. 通訳案内業

これはいわゆる通訳というよりも外国からきた観光客にその国の言葉を使って観光案内する仕事である。この仕事に就くには「ガイド試験」という国家試験に合格する必要がある。この試験では語学力だけでなく、日本の歴史、地理、文化、経済等の知識の有無も試されるので、合格者は受験者の 2、3 割と言われている。また、この試験に合格したとしても、この分野で生計を立てている人は合格者の 1 割くらいであると推定されている。

5-3. 海外に支店や工場をもつ会社または外資系企業への就職

日本では、少子化が進んでいることもあって、大学を卒業して就職することはそれほど困難ではない。ただし、これは職業を選ばない場合であって、学生が希望する企業に実際に就職するにはやはり困難が伴う。したがって、自分の語学力を生かせる企業に就職するには、努力と運が必要で、またたとえ目指す企業に就職できたとしても、希望する部署に配属されるかどうかは分からない。

また、日本企業は大学の新卒を尊重するので、いったんある会社に就職してから他の会社に転職するのはむずかしいことが多い。一方、外資系企業は社内でじっくりと人材を育てるのではなく、即戦力となる人材を求めることが多いので、ある会社で経験を積んでから、転職することが多い。

6. 筆者の経験

6-1. 生い立ち

筆者は、中学時代に語学に興味を持ち始め、中学 3 年生のころから英語以外にドイツ語、フランス語、スペイン語、中国語、朝鮮語等の学習を始め、また「比較言語学入門」等の書物も読み出した。

高等学校時代は、大学受験科目の中に英語が入っていることもあって、英語を重点的に学習したが、ドイツ語およびフランス語も趣味として学習を続けた。

高校卒業後、ある大学の機械工学科へ入学した。二年間の教養学部では、英語、ドイツ語およびフランス語のうち 2 カ国語が必修であったが、筆者はドイツ語およびフランス語で単位を取った。もちろん英語の授業にも出席した。

6-2. 社会生活

大学の修士課程を修了して、ある鉄鋼会社 K 社に就職し、希望により機械設計部門に配属された。担当した機種は、ゴムやプラスチックを混練する機械、石油開発生産用バルブ、食品加工機械等であった。設計部門では、新製品の開発および生産設計に従事した。それには、設計図面作成、設計計算等が含まれる。設計者は、自分が図面を作成した部品の機械加工、寸法検査および組立作業を見るために頻繁に工場を訪れる。また社内試運転および国内または国外で行われる現地試運転にも立ち会う。このように工場で機械やその部品の実物を見ることが、のちの技術翻訳の仕事に大いに役立った。また、K 社に在職中、世界各国を訪問し、英語で自分が設計を担当している機械の技術説明、講演や技術折衝を行った。これらの仕事を通じて、英語での意思疎通がほぼ完全にできるようになった。また日頃、英字新聞や英字週刊誌の購読を通じて英語力を付けるようこころがけた。

6-3. 翻訳会社の設立

(1) 翻訳会社設立の経緯

筆者は、一企業で一生を終えるのではなく、第二の人生を歩むことを考えるようになっていた。同じ会社の先輩が取扱説明書を作成する会社を設立して独立したことに刺激され、定年退職の 1 年前に技術翻訳会社を設立した。当初は、この先輩の会社から機械の取扱説明書の英訳の仕事をもらい、細々と経営を続けた。しかし、他社からも定常的に仕事を得るのはむずかしかった。

そのうち、転機が訪れた。筆者は、翻訳会社を設立する前に、某語学教育会社の技術翻訳通信教育を受講していたが、そのテキストに間違いがあまりにも多かったので、それを題材にしてA4サイズ42ページの小冊子「*危ない翻訳*－技術英語の陥し穴」をまとめていた。ある日の新聞広告で英会話学校を経営しているN社が翻訳者を募集しているのを知り応募した。N社の翻訳・通訳部門の責任者と会ってもらえることになったので、上記小冊子を持参したところ、非常に気に入ってくれて、それ以降N社から定常的に仕事がもらえるようになった。その後N社の翻訳・通訳部門は独立して、G社となり元の責任者が社長になった。現在筆者は、G社の技術翻訳顧問を務め、またインターネット通信講座のテキスト作成および講師の仕事もしている。

現在の仕事の大部分は、上記G社からもらっているが、K社を退職して以来、このK社および関連会社からも不定期ではあるが受注している。G社の仕事はいわば下請けであるが、後者の会社からは直（じか）請けになるので収益も高い。

(2) 設立した会社での経験

1) 仕事の獲得

筆者は、上記G社から技術翻訳に関してトップの実力をもっていることを認められている。したがって、仕事がないときはこちらから依頼すれば仕事をもらえ、逆に仕事が一杯あるときは辞退できる状態になっている。

2) 社員

当社は、会社を設立して仕事がある程度軌道に乗り出した頃、新聞で在宅翻訳者を募集し、試験を受けてもらい、7、8名の翻訳者を抱えていたことがある。ただ、仕事をこれらの在宅翻訳者にばらまき、彼らの訳文をチェック・修正するという体制を続けて見た結果、筆者の時間の大半は、彼らに稼がせるために費やしていると感じるようになった。そこで、翻訳者の数を絞って事務所で彼らを徹底的に教育し、筆者があまりチェック・修正をしないでも納品できる体制に変更し、今日に至っている。

3) 採点の仕事

筆者が主として仕事をもらい、また技術翻訳顧問もしているG社では、常時在宅翻訳者を募集しており、技術分野の試験の問題の作成と採点を筆者が行っている。その採点作業から言えるのは、まず技術分野の知識が乏しい人が多いことである。解答者が、原文の本質的な意味を理解しているかどうかは訳文を見れば一目瞭然である。次に多いのは、日本語作文能力が乏しい人である。逆に言えば、これらの問題点を克服しないかぎりプロの翻訳者にはなれないということである。

6-4. 通訳の経験

筆者の経験した通訳はすべて逐次通訳であり、国際会議等において同時通訳できるだけの能力はない。

(1) 社内通訳

筆者の会社勤務時代に所属していた部署では、米国から技術導入した機種を扱っていたため、米国人の来訪が多かった。それら米国人との社内打合せや日本の顧客の工場での技術説明会等では、筆者が通訳を務めた。内容はすべて筆者が熟知している分野に関係したものなので、通訳作業に何の苦労もなかった。

(2) 出張通訳

翻訳会社を設立して以降、社外での通訳を数回務めた。そのうち1件は、ある翻訳会社からの

要請で、外国の検査会社が日本の機器メーカを訪問して機械の検査を行ったときの通訳である。筆者が通訳者として会議室に入ったのは、検査が始まってから 3 日後であったが、依頼主から筆者に対して何の説明も無かったため、どんな装置に対する検査かも分からずとまどってしまった。その日の午後全員で、工場へ行き検査対象になっている装置を見学することができた。これ以降の検査会社とメーカとの間の質疑応答の通訳はスムーズに行うことができた。この会議は筆者が、参加してから 5 日間続いた。この会議の数ヶ月後、また 5 日間ほど続きの会議が行われた。

もう 1 件は、日本の外資系化学会社が導入する各種装置のメーカに対する評価のための会議であった。これは、筆者の勤務していた会社の調達部から依頼されたもので、筆者はあるバルブメーカの通訳を勤めた。通訳をするにあたって特に問題はなかった。

(3) 通訳のコツ

上記の外国の検査会社との会議について、当初は、課長クラスの人間と担当者が出席していたが、何日かすると日本側の主役は、担当者 1 名になってしまった。筆者は彼と相談して、できるだけ短くしゃべってもらい、文をいくつかに区切って逐次通訳を行った。この場合、語順が変わってしまうが、一応すべての情報を英語にして相手に伝えれば、理解が困難という事態にはならない。たとえば、日本語で「連絡がありました、彼が到着したと、現地へ、昨日夜」という言い方をしても理解できるであろう。

一般的な通訳として、話者がしばらくしゃべり、通訳者がメモをとり、あるタイミングでその内容を外国の相手に伝えるというやり方をよくみかける。これが一般的な逐次通訳であるが、この場合訳し洩れがあったり、迅速性が失われたりするので、筆者としては上記のような文を区切った逐次通訳の方がよいと考えている。もっとも、これは、当事者の意見を聞いてから決めなければならないのは当然である。

(4) 通訳者のいる会議に出席した経験

中国と日本との会議で中国人が通訳しているのを聴いたことがある。このとき、次のような問題点があることに気付いた。

1) 文語調（例：遅きに失する、改善すべく、惜しむらくは）や慣用句的（例：・・・の動きになっている）な表現が使われると、中国語に訳すのがむずかしい。発言者は、このことを認識し、平易なことばで話さなければならない。発言者も自分の発言を相手に十分理解してほしいと思っているはずなので、この問題点は理解できるはずである。

2) 地名・人名等の固有名詞や外来語が登場することがある。漢字の固有名詞については、その漢字が分からないかぎり通訳のしようがない。また、日本語では、外国語、特に英語をそのまま日本語風に発音して使用することが多いが、その語が中国語に訳されて普及するのに時間的ずれがあり、またそれを即座に中国音にすることもむずかしい。

3) 話に切れ目がなく、延々と続く（例：・・・ということが言えますが、逆に・・・ということもあり、この場合、・・・なので、・・・するとともに、・・・を検討する必要もあり、・・・ということになるとしても、・・・）。通訳者は、発言者に対して一文の長さを短くしてしゃべるようあらかじめ依頼しておかなければならない。

(5) 通訳の余談

自分のよく知っている分野の通訳であるかぎり、通訳は翻訳よりもずっと楽である。というのは、通訳料は拘束時間単位で支払われるが、たとえば上記の会議の場合、外国人側または日本人側のみの打合せが行われることがあって、その間通訳は必要ないからである。また翻訳のように 1 日中パソコンに向かうために眼が疲れたり、腰が痛くなったりすることもない。

ただし、国際会議の同時通訳ともなれば、予習にかなり時間を取られるので、かなり体力を消耗することになる。

また、翻訳料は時間ではなく語数で決まるので、短時間で大量の仕事をこなそうとすることや、常に納期に追われることなどが、ストレスの溜まる原因になる。

7. まとめ

プロの翻訳者になるためには、日本語および外国語の優秀な作文能力および専門分野の豊富な知識をもつことが不可欠である。専門分野の知識は、幅広くかつ深いことが要求されるので、これで十分であるというレベルはない。したがって、学習は一生続けなければならない。通訳者については文法的に正しい日本語および外国語を話す能力が必要なのはもちろんで、専門分野の知識については翻訳者と同じことが言える。

以上